## 表紙によせて

### ***スカシユリ Lilium maculatum* Thunb.**

絵：角田葉子（2008年7月 伊豆半島城ヶ崎にて）

日本原産のユリには、テッポウユリ、ヤマユリ、カノコユリのように世界の園芸界で重要な種が多数あるが、もうひとつ忘れてはならない自生種がある。それが今回の表紙を飾っていただいたスカシユリで、和名の「透しゆり」というのは、花被片の下部が細くなって、花の中心部に透き間ができることによる。他の多くのユリが花を横向きや斜め下向きに咲くのに対して、本種は上向きに花を開く。ちなみに、ツンベリーがつけた学名の種小名は、花に斑点があるというような意味である。

スカシユリは多くの場合に6―7月に開花し、花の色は赤橙色に赤褐色の斑点があり、花径は12―14㎝。1本の茎に3―5輪をつける。茎は直立して稜をもち、稜や茎の基部には乳頭状の突起が多く、若いときには茎全体に綿毛がある。葉は互生して葉柄はなく、線状披針形、鋸歯はない。地下の鱗茎は卵状球形で白色、鱗片は先がとがって密に重なる。

スカシユリの仲間は、太平洋側では紀伊半島の南端から伊豆半島や伊豆諸島を経て、房総半島から三陸海岸へかけての沿岸部の砂浜や崖地帯、日本海側では富山県から新潟、秋田を通って青森県の海辺や絶壁に多く、佐渡島や粟島、飛島などでは、5月中、下旬からキスゲの仲間のトビシマカンゾウとともに初夏を彩る花として観光的にも有名である。さらに、北海道まで脚を伸ばすと湿原や草原、とくに各地の原生花園の初夏を彩る花としてよく知られている。北海道のものはエゾスカシユリ *L. maculatum* subsp. *dauricum* (Baker) Haraとして植物分類学上からはスカシユリの亜種とされる。

また、本州の沿岸部に自生するものにはイワトユリという別名があって、栽培種と自生種を区別する場合には、栽培種にはスカシユリ、自生種にはイワトユリを使い分けることがある。その理由は、江戸時代から栽培されていたものにつけられた名がスカシユリであり、それらは花色などの人為的な選抜が加えられたものであったり、エゾスカシユリの血も入り込んでいた可能性が高いため、自生個体とは区別しておくべきであるという考えである。学名についても、かつて、牧野富太郎博士はツンベリーのつけた学名は栽培種に由来するという考えから、自生種には *L. maculatum* var. *spontaneum* Makino ( *spontaneum* は自生のという意味 ) として区別した。しかし、現在の植物分類学の世界的な流れは、違いに着目して細分化するよりも、近縁のものは出来るだけまとめるという方向であるから、本州産の自生種にもスカシユリを使い、学名には var. *spontaneum* はつけないことが多い。

スカシユリがヨーロッパに渡ったのは 1830 年といわれ、本格的な育種がはじまったのは 20 世紀に入ってからであるが、スカシユリ、エゾスカシユリ、オニユリなど花被にカロチノイド色素をもつオレンジ系の花色と上向きに咲く花の特徴を生かした多くの品種が育成されている。花色も近年は橙色だけでなく、黄色、赤色、白色、ピンク、複色、斑点のないものなど様々な品種がある。このスカシユリを中心にした主として上向き花の改良品種は、ヨーロッパではアジアティック・ハイブリッドとよばれ、丈夫で栽培しやすく、日本でも切り花や庭植え用に広く利用されるようになった（本学名誉教授、前所長箱田直紀）。